東海環状自動車道 発掘調査だより

いなべ編　No.9

三重県埋蔵文化財センター　2020.8.1

縄文時代早期の炉穴（ろあな）を発見！

《空畑遺跡》

縄文時代早期の集石炉（南から）　直径約 1 m、深さ約 15 ㎝。灰や炭とともに焼けた石が多く入っています。

はじめに

三重県埋蔵文化財センターは、東海環状自動車道建設事業に伴い、平成 29 年度から、いなべ市北勢町塩崎にある空畑遺跡（そらばたいせき）の発掘調査を行っています。今回の第 5 次調査では、縄文時代早期（約 10,000 年前）と縄文時代前期（約 6,000 年前）の遺構・遺物を確認しました。

今回の調査でみつかった遺物

出土遺物（左上：関東系の土器、右上下：関西系の土器、左下４点：黒曜石の石器と剥片）

縄文時代前期の土坑からは、県内でよくみられる関西系の北白川下層式（きたしらかわかそうしき）土器とともに、関東系の諸磯式（もろいそしき）土器が出土しています。

石器の大半は地元で採れるチャートや奈良県の二上山産のサヌカイトで作られていますが、長野県産とみられる黒曜石製のものも少数ですがみつかっています。

直接の交流があったかどうかは分かりませんが、縄文時代前期にも、遠い地域の石材などを入手する方法があったことが分かります。

まとめ　空畑遺跡ではこれまでの調査で、縄文時代前期の竪穴建物や、墓の可能性が考えられる土坑などが多数みつかっています。縄文時代前期の集落跡がこれほどまとまったかたちでみつかった遺跡は県内では他にありません。

今回の調査では、竪穴建物などが東側に広がっていないことが明確になりました。集落の範囲や大きさなどを考えるうえで大きな成果といえます。また、少数ですが、縄文時代早期の炉穴が遺跡内の広い範囲に点在していることが分かりました。炉穴ばかりで、同じ時期の竪穴建物がみつからなかったことは、この時期のひとびとの生活スタイルを知るうえで重要な手がかりとなる可能性があります。

空畑遺跡からは多数の土器・石器が出土しました。縄文土器には、関西系の北白川下層式や関東系の諸磯式などがあり、石器の石材も在地のチャートだけでなく、遠隔地のサヌカイトや黒曜石などがあります。当時のひとびとのくらし、ものや文化のひろがりなどを知るうえでどれも貴重なものといえます。

遺跡名　空畑遺跡
原因事業　東海環状自動車道建設事業　調査委託　国土交通省中部地方整備局　調査主体　三重県教育委員会

調査担当　三重県埋蔵文化財センター　〒515-0325　三重県多気郡明和町竹川 503
TEL:0596-52-1732/FAX:0596-52-7035　https://www.pref.mie.lg.jp/MAIBUN/hp/
いなべ整理所　〒511-0415　三重県いなべ市北勢町東貝野 454 番地
TEL:0594-72-8955/FAX:0594-72-8970

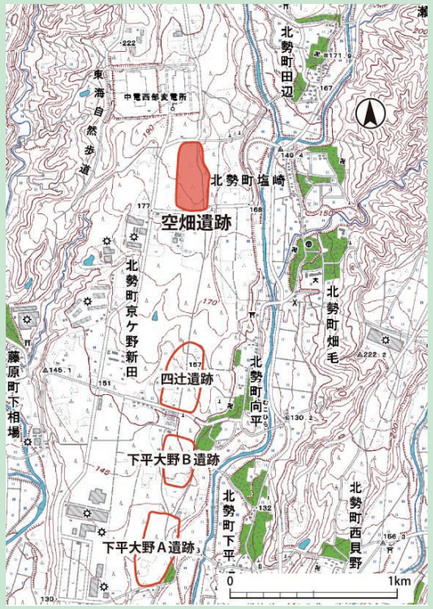
空畑遺跡と周辺の遺跡

空畑遺跡は、田切川の西にある「京ヶ野台地」とよばれる河岸段丘上にあります。平成 18 年度に、畑の中に土器や石器がたくさん落ちていることが分かり、新しく遺跡として知られるようになりました。

発掘調査は平成 29 年度から始まり、これまでに縄文時代～弥生時代の遺構・遺物がみつかっています。

空畑遺跡のある段丘上には、ほかに、四辻遺跡・下平大野 A 遺跡・下平大野 B 遺跡など、多くの遺跡が確認されています。とくに、四辻遺跡では、令和元年度の発掘調査で縄文時代早期の竪穴建物が 3 棟みつかっており、空畑遺跡の炉穴との関連性など、注目できます。

下平大野 A 遺跡・下平大野 B 遺跡でも石器などが採集されていることから、縄文時代の遺構がみつかる可能性があります。



空畑遺跡周辺の主な遺跡

※国土地理院（1:25,000)「駒野」「阿下喜」に加筆作成

四辻遺跡の竪穴建物（北東から）

直径約 4.5m、深さ約 20 ㎝。中央に向かって浅い皿状に凹んでいます。中央付近に長径約 70 ㎝、深さ約 20 ㎝の楕円形の穴がみつかりました。この穴からも竪穴建物と同じ時期の土器片が出土しました。

今回の調査でみつかった遺構

今年度は、遺跡の東端部の 3,000 ㎡を調査しました。今回みつかったのは、縄文時代早期（約 10,000 年前）の炉穴（ろあな：火をたいた穴）２基と、縄文時代前期（約 6,000 年前）の土坑（どこう：大きめの穴）２基、時期不明の土坑３基です。

縄文時代早期の炉穴は、煙道付炉穴（えんどうつきろあな）と集石炉（しゅうせきろ）の２種類がみつかりました。

縄文時代前期の土坑は、斜面にあり、昨年度みつかった墓の可能性のある土坑とは形が異なっています。土坑からは土器片や加工されていない礫（れき）などが出土しましたが、どのような目的で掘られた穴なのか詳しいことは分かりません。

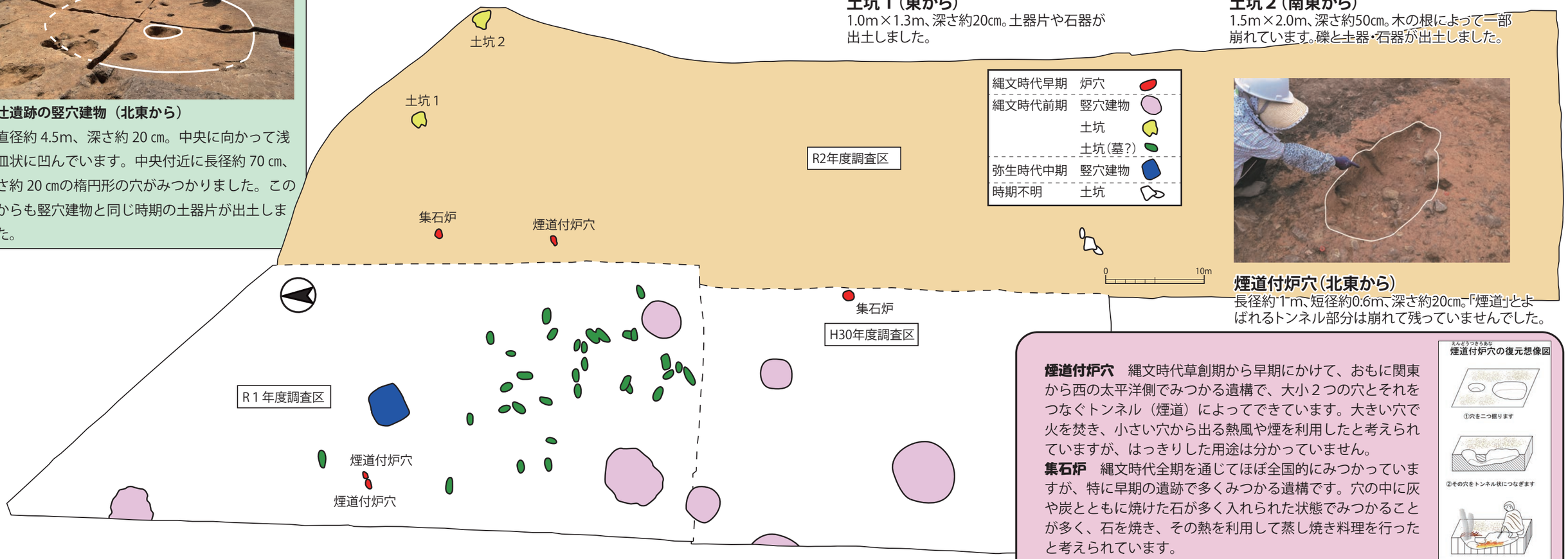
そのほか、調査区の中央部でみつかった３基の土坑は、遺物が出土していないため、現在のところ時期不明としていますが、形状や穴に入っていた土の特徴などが、昨年度みつかった墓の可能性のある土坑に類似しているものもあり、前期の遺構である可能性があります。

土坑１（東から）

1.0m×1.3m、深さ約20㎝。土器片や石器が出土しました。

土坑２（南東から）

1.5m×2.0m、深さ約50㎝。木の根によって一部崩れています。礫と土器・石器が出土しました。



煙道付炉穴（北東から）

長径約 1 m、短径約0.6m、深さ約20㎝。「煙道」とよばれるトンネル部分は崩れて残っていませんでした。

煙道付炉穴　縄文時代草創期から早期にかけて、おもに関東から西の太平洋側でみつかる遺構で、大小２つの穴とそれをつなぐトンネル（煙道）によってできています。大きい穴で火を焚き、小さい穴から出る熱風や煙を利用したと考えられていますが、はっきりした用途は分かっていません。

集石炉　縄文時代全期を通じてほぼ全国的にみつかっていますが、特に早期の遺跡で多くみつかる遺構です。穴の中に灰や炭とともに焼けた石が多く入れられた状態でみつかることが多く、石を焼き、その熱を利用して蒸し焼き料理を行ったと考えられています。